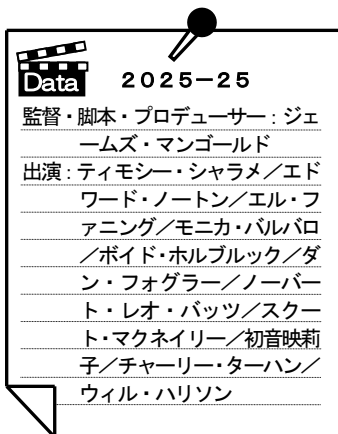




みどころ

本作が描くのは、19 歳から 23 歳までの“フォークの神様”ボブ・ディラン。そんな有名な男の映画が、なぜこんなタイトルに？

アカデミー賞主演男優賞は『ブルータリスト』(24 年)のエイドリアン・ブロディが受賞したが、私見では、ボブ・ディランの曲をすべて自前で、かつライブで歌い切った若手のホープ、ティモシー・シャラメの方に軍配を！ギターとハーモニカの伴奏を含め、大スクリーン上での 19 歳のボブ・ディランの再来にビックリ！同じ年のジョーン・バエズと共に歌う姿も、彼の代表曲『風に吹かれて』の作曲風景もピッタリ決まっている。

そんな彼が、自分を大スターに引き上げてくれた先輩歌手のピート・シーガーが主催する“フォークの祭典”に満足できなくなったのは一体なぜ？本作をボブ・ディランの伝記モノとしてではなく、自分の生きざまを求めてさまよい歩く、一人の若者のある一時期の姿として、しっかり鑑賞したい。

■タイトルに注目！なぜこんなタイトルに？■

本作の原題は『A COMPLETE UNKNOWN』。それを忠実に日本語に翻訳した邦題が『名もなき者』だ。世の中には「名もなき者」がたくさんおり、多くの「名もなき者」たちが歴史を作ると、よく言われているが、本作の主人公はボブ・ディラン。言うまでもなく、ボブ・ディランはアメリカの伝説のミュージシャン（フォーク歌手）で、『風に吹かれて』を代表曲とする彼の楽曲は、世界中で超有名だ。1941 年生まれの彼のアルバムのトータルセールスは 1 億 2500 万枚を超えているうえ、今なお年間 100 回近いライブを行い、第一線で活躍中というから、恐れ入る。しかも 2012 年には、文民最高位の「大統領自由勲章」を授与され、2016 年にはノーベル文学賞を受賞しているから、まさに世界の超有名な

だ。日本の歌手で言えば、“フォークの神様”という意味でもカリスマ性という意味でも、最も近いのは、さしずめ吉田拓郎・・・？女性ならユーミンや中島みゆきだが、世界的な有名さでは当然、ボブ・ディランが数倍上だ。

有名歌手の生涯や生きざまに焦点を当てた映画には、レイ・チャールズをテーマにした『Ray／レイ』(04年) (『シネマ 7』149頁)、エルヴィス・プレスリーをテーマにした『エルヴィス』(22年) (『シネマ 51』26頁) 等があるが、本作はボブ・ディランの生涯を描く“伝記もの”ではなく、1961年から65年(19歳から23歳)までの、まさに激動の“青春時代の一部”に焦点を当て、ボブ・ディランの“素顔”に限りなく迫ったものだ。そんな本作の最大の見どころ(聴きどころ)は、『DUNE／デューン 砂の惑星』(21年) (『シネマ 50』38頁) 等で一躍世界のトップスターになったティモシー・シャラメがボブ・ディラン役を演じたこと、しかも、全編吹き替えなしはもちろん、ティモシー・シャラメは、ボブ・ディランの楽曲をすべて事前録音ではなく、オールライブで歌っていることだ。2019年末に始まったコロナ禍は、その名のとおりに世界中を大変なパンデミック状態に陥れたが、ティモシー・シャラメにとっては、コロナ禍によってすべての活動が制約されたことが、ボブ・ディランの音楽に没頭し、ギターとハーモニカの練習ができる絶好の機会になったらしい。

その結果、本作冒頭、ボブ・ディランがニュージャージーにある退役軍人病院に入院中の“敬愛するフォークシンガー”ウディ・ガスリー(スクート・マクネイリー)を訪れ、ウディとたまたま見舞いに来ていた同じフォーク歌手のピート・シーガー(エドワード・ノートン)の前で、ウディのために作曲した自作の曲をギター1本で歌った時の歌声を聴き、驚愕!こりゃ、ホンモノの19歳のボブ・ディランが蘇ったの?本気でそう思うほど、ティモシー・シャラメの歌声と演奏は素晴らしかった。『DUNE／デューン 砂の惑星』を観た時のティモシー・シャラメは、若くてカッコ良いだけの俳優だと思っていたが、何の何の、素晴らしい才能と素晴らしい努力ができる素晴らしい俳優であることを認識!

■□■時は1961年、19歳のボブがプロのミュージシャンに■□■

ギターを片手にヒッチハイクする19歳のボブ・ディランが、ニューヨークのマンハッタンにたどり着いたのは1961年。彼がマンハッタンの退役軍人病院にやってきたのは、敬愛するフォーク歌手ウディ・ガスリーが病に倒れたと聞いたためだが、病院の部屋の中で、ウディとピート・シーガーの前で、ウディを称える自作の曲を歌えたのは超ラッキーだった。この曲を大いに気に入ったフォーク界の大御所ピート・シーガーは、フォーク界の新星登場!と瞬時に判断し、現在売り出し中の女性フォーク歌手ジョーン・バエズも出演するナイトクラブのステージにボブを立たせることに。すると、ボブの姿と歌声は、客席にいた音楽マネージャー、アルバート・グロスマン(ダン・フォグラウ)の目に留まり、更にその上の大プロデューサーにも認められたからすごい。そして、これによって、19歳のボブ・ディランはレコーディングのチャンスを得て、プロのミュージシャンとしてのキ

キャリアを開始することに。

■□■シルヴィと恋に！微妙な三角関係も！なるほど・・・■□■

『Ray／レイ』では盲目の黒人歌手、レイ・チャールズの、『エルヴィス』ではロックンロールの神様、エルヴィス・プレスリーの私生活（真の姿？）をのぞいてしまったが、本作でも1961年、19歳でプロのミュージシャンとしてデビューしたボブの、1961年から65年までの私生活（真の姿？）をのぞいてしまうことに。

レイ・チャールズの私生活上の問題は女性問題とヤク問題、プレスリーのそれは酒と薬物だったが、若き日のボブ・ディランの私生活上の問題は、当然女性との恋愛問題だ。プロのミュージシャンとしての活動を開始した直後のある日、アーティストで公民権運動にも積極的に参加する女性、シルヴィ・ルッソ（エル・ファニング）と教会のライブで出会ったボブは、彼女との会話が刺激に満ちたものであったため、たちまち恋に落ちることに。

他方、1962年、アメリカ社会は冷戦の激化の末、キューバ危機で核戦争の脅威にさらされることに。そんな中でも、ボブは事態を自らの歌で見据え、ライブハウス「ギヤスライト」で歌い続けていた。そんなボブが仕事仲間として親しくなったのが、同じ年代の女性フォークシンガーとして有名になっていたジョーン・バエズ（モニカ・バルバロ）。「ギヤスライト」でのディランの魂と歌に心揺さぶられたバエズは、その日、ボブと愛を交わすことに。すると、ボブを真ん中にした、シルヴィとジョーン・バエズとの三角関係は？

ボブ・ディランが代表曲『風に吹かれて』を作曲し始めたのは、そんな時期だったらしい。もちろん、今はまだレコーディング前だが、ボブが作りかけの『風に吹かれて』を歌い始めると、バエズも声を重ねていった。その結果、バエズはコンサート会場でボブの自作曲をカバーするまでの仲になったが、それをシルヴィはどのような目で見ていたの？学生運動に明け暮れていた19～20歳の私の大学時代は、私を含め友人たちの多くが恋愛問題に悩んでいたが、その中には当然、妊娠問題や三角関係もあった。そんな貴重な体験をした私は、ハラハラ、ドキドキしながら、かつ興味深く、スクリーン上で展開していくボブ・ディランとシルヴィ・ルッソそしてジョーン・バエズとの三角関係の推移を観ていたが・・・。

■□■フォークの祭典に出演！一躍チャーム人気者に！■□■

日本でフォークソングブームが起きたのは、1960年代の後半。ベトナム戦争反対をメインとする学生運動が激化していたのと並行するかのよう、フォークソングブームも広がっていった。ボブ・ディランの『風に吹かれて』や、ジョーン・バエズの『花はどこへ行ったの』『ドナドナ』等はその代表曲だ。日本でも、それらのアメリカ直輸入のフォークソングは大ヒットしていたが、学生運動の中では、“革命”歌『インターナショナル』などと共に、高石ともやの『受験生ブルース』や岡林信彦の『友よ』等が好まれて、大合唱の中で歌われていた。

また、日本ではフォークの祭典として「全日本フォークジャンボリー（中津川フォークジャンボリー）」が有名だが、アメリカのフォークの祭典としては「ニューポート・フォー

ク・フェスティバル」が有名。それを主催していたのはピート・シーガーたちフォークソングをこよなく愛するミュージシャンたちだ。ボブ・ディランがそんな“夢の舞台”に初めて参加し、ステージに立って歌ったのは1963年。多くの観客が新しい時代の新しいフォーク歌手としてボブ・ディランを全面的に受け入れる中、彼の名前は急速に全米に広がり、超有名人になったが、ボブ・ディランにとって、そのことのプラス面とマイナス面は？

公民権運動やジョン・F・ケネディ大統領暗殺事件等、激動の1960年代に起きた出来事を見つめながら、作曲活動とライブ活動を続けてきたボブ・ディランにとって、ファンから追い回される日々は想定外のもので、到底耐えられるものでなかったことは明白だ。そんな中でも彼は次々と作曲を続け、毎年のようにアルバムを出し続けていたが・・・。

■□■俺の音楽は？その追求からロックの世界へ！■□■

ボブ・ディランが天才であることは、本作冒頭に、入院中のウディ・ガスリーと見舞いに来ていたピート・シーガーの前で自作の曲を歌うシークエンスで私にもすぐにわかる。したがって、フォークの先輩で、ニューポート・フォーク・フェスティバルを主催していたピート・シーガーがボブの天才性を見抜いたのは当然だ。また、それから後のボブ・ディラン人気の爆発ぶりも、ある意味予想どおりだった。ボブ・ディランと同じ年の女性フォークシンガー、ジョーン・バエズは美しい声でトラディショナルなフォークを歌うことによって絶大な人気を獲得し、それに満足していたが、時代の動きや社会問題をネタにして自作の曲を次々と作り続ける天才ボブ・ディランはそうではなかったらしい。つまり彼は、既存のトラディショナルなフォークソングの祭典であるニューポート・フォーク・フェスティバルに少しずつマンネリ化を覚え、その“改革”の必要性を考えていたわけだ。ボブ・ディランがビートルズと初めて出会ったのは1964年、ニューヨークでのことらしい。その影響を受けたのかどうかは知らないが、その頃からボブ・ディランは従来のフォークに飽きたらず、ロックの世界にも取り組むようになったらしい。

このように、次第にトラディショナルなフォークソングに満足できなくなってきた彼は、少しずつロックの世界にも入っていくことに。その結果、1965年に開催された「ニューポート・フォーク・フェスティバル」では、トリとしての出演が決まっていたボブ・ディランが、何とピート・シーガーら主催者側の意向に反して、突然舞台上でエレクトリック・スタイルのハードな演奏を始めたから、ビックリ！会場を埋め尽くした大勢の観客からは大ブーイングが！ピート・シーガーたちフォークの祭典の主催者たちは、直ちに演奏の中止を命じたが、1965年のフォークの祭典はそんな大混乱の末、最後にボブが予定曲を歌うことによって収束したが、その影響は？ボブ・ディランにとっての「俺の音楽の追求」は、この時点で、どこまで到達していたのだろうか？

■□■60年代のフォークは私にとって英語の教材にピッタリ■□■

日本のフォークソングが花開いたのは、前述のとおり1960年代後半。大ヒットした日本初のオリジナルフォークは浜口庫之助が作曲し、マイク眞木が歌った『バラが咲いた』(66

年)だ。学生運動が高揚する中、『友よ』等大ヒットしたが、アメリカから直輸入されたフォークの代表は、『花はどこへ行ったの』だ。

フォーク・ブームと共に始まったのが、(フォーク)ギターブーム。ギターの練習は一方ではギターの大ヒット曲『禁じられた遊び』の練習だから難しい。しかし、フォークギターの基本はコードを覚えることだから、比較的簡単だ。しかも、当時の誰にでも親しまれた、わかりやすく歌いやすいフォークソングは、コード進行が単純。ハ長調の曲だったら主要三和音のC(ドミソ)、F(ファラド)、G7(シファソ)、イ短調の曲だったらAm(ラドミ)、Dm(ラレファ)、E7(ソ#レミ)という主要三和音のコードを繰り返せばOKの曲が多かった。また、歌詞も基本的に単純だから、英語の勉強に苦しんでいる中学生、高校生には、フォークソングの練習は英語の勉強にもなっていた。そんな時代状況下、アメリカから直輸入されてきたボブ・ディランの代表曲『風に吹かれて』の歌詞とコード展開は？同曲の邦題は『風に吹かれて』だが、英語の歌詞では、さまざまな疑問を提示したうえ、「その答えは風の中にある」とアンサーするアンサー・ソングのスタイルになっているから、極めて覚えやすい。

私の中学時代、高校時代、一方では大学の受験勉強のプレッシャーにさらされながら、他方では映画、将棋、囲碁、卓球等々に逃避していたが、フォークソングやギターの練習は、英語の勉強も伴うものだからうれしい。もっとも、『花はどこへ行ったの』は簡単だったが、『風に吹かれて』は少し難しかったから、同曲の完璧な演奏と英語での歌唱はボブ・ディランに程遠いまま・・・。

■□■アカデミー賞は全敗！8部門全てダメ！こりゃ残念■□■

第97回アカデミー賞は3月7日に発表されたが、私の予想通り、最優秀主演男優賞はエイドリアン・プロディがゲット。意外だったのは、本作と同じ日に観た『アノーラ』(24年)が作品賞、監督賞、主演女優賞、脚本賞、編集賞の5部門を受賞したことと、その反面(とばっちり?)として『名もなき者』が1部門も受賞できなかったことだ。

本作は作品賞はもとより、ジェームズ・マンゴールドが監督賞、ティモシー・シャラメが主演男優賞、エドワード・ノートンが助演男優賞、モニカ・バルバロが助演女優賞にノミネートされた他、脚色賞、音響賞、衣装デザイン賞を含む計8部門にノミネートされていたが、残念ながら全敗！こりゃ残念だ。

私は同じ日に本作に続けて『アノーラ』を鑑賞したが、正直なところ、作品の出来としては本作の方が数段上！私はそう感じた。もっとも、主演男優賞は、『ブルータリスト』(24年)のエイドリアン・プロディと本作のティモシー・シャラメは、人によって判断が分かれるのは仕方ない。また、助演男優賞も助演女優賞も、対比すべきライバル作を見ていないので何とも言えないが、ピート・シーガー役を演じたエドワード・ノートンもジョーン・バエズ役を演じたモニカ・バルバロも、十分助演男(女)優賞に値する熱演(歌声と演奏)だった。

2025(令和7)年3月11日記